

「はい、各駅停車の電車に乗りたい。急がず、ゆっくり……」

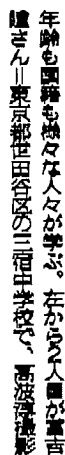
午後一時、東京都世田谷区立三宿中学の校庭で、臨時の「国語の教材を二つ二つ区切って、音読せよ。続いて先生が「あなせん」の意味を尋ねよう」というゲームをした。辞書を引いた。

昨年4月に入学した時は、タイ人のラムサイという名前だった。来日15年目の昨年、日本國籍を取得した。机を並べるのは、10代から10代、競争、奮闘、それぞれの強運で中学に行けなかった年配の日本人男女や韓国人女性、かつて不登校だった少女らもいた。

タイ北部の農村生まれ。家は貧しく、小4までしか通えなかった。両親が離婚し、父は出て行った。カエル、へビ、ネズミ、何でも食べた。兄弟の3番目。母への仕

進りのため、10歳でバンコクに留守に出た。

19歳の時、タイ語を学ぶた
の日本から留学に来ていた秀



明さん(46)と知り合った。た
また、同じアパートに住んで
10年以上が過ぎた。

す、10年以上が過ぎた

「タイ語でも読み書きができてない部分には自信がない。」「それでいいの？」「二字が書けるからかぢやない。心が好きだから、一柱になりたいんだ。」「二人は結婚し、日本へ移る事になった。夫は飲食店の設計を営んでいる。彼女は来日直後、スー

入學後、ひらがなとカタカナの漢字の読み書き、足し算、引き算から文字など、指を動かして計算する。少しずつ複雑になっていくのは覚悟してはならない。

「お名前と住所を」。銀行
や美容院で、よく書かれるた
びにうづもれた。「『めん
なさい、書けないんです』と
言つていかなかった。恥ずかし
かった」

もむむと巨漢は話をもつて
になったが、読み書きはでき
ない。

午後四時半、夜に帰つて同
居に入つた後、こたつの上で
プリントを片ける。小女の算
数をしていゝと、子とむねの
「一分かゝる」と聞いてゐる。
夜中の一時半で眠鐘し、「い
いやす」と発明さんにてい
られる。

人を罵つた。二棒に背打をうけて、うねと腰をうに呼びかける。

[illegible]

ある日の技術の時間、本土の小惣入れを作りながら、身の上詣に花が咲いた。同級生の村杉ミツ子きん(おしほ)は、「また35歳でしょう。ひよ花も、ふた花も咲かせられるよ」と肩をたたく。村杉さんもお小までしか通えず、子守の婆公に出される事も読めなかった。昭和60年の越前入道に遇ふ。